

## 平成30年度 第1回北海道立総合博物館協議会 議事概要

|                 |  |
|-----------------|--|
| 会議名             | 平成30年度 第1回北海道立総合博物館協議会   |
| 開催日時            | 平成30年6月8日(金) 13時30分～15時00分   |
| 開催場所            | 北海道博物館 講堂  |
| 出席委員            | 大原昌宏会長、澤田一憲副会長、宇佐美暢子委員、児島恭子委員、佐々木史郎委員、湯浅万紀子委員  |
| 欠席委員            | 竹垣吉彦委員   |
| 出席者<br>(博物館、本庁) | 【博物館】<br>石森館長、山中副館長、中村アイヌ文化担当副館長、小川学芸副館長兼アイヌ民族文化研究センター長、川田総務部長、舟山学芸部長、右代学芸主幹、会田学芸主査、遠藤研究職員、村上学芸員<br>【本庁】<br>佐藤主幹、今主査、林主査(文化振興課)、栗原主幹(アイヌ政策課) |
| 傍聴者             | なし   |

## 【議 題】

## (1) 報告事項1 平成30年度 北海道博物館事業実施計画

・資料2に基づき、北海道博物館の平成30年度事業実施計画について、舟山学芸部長、小川アイヌ民族文化研究センター長、川田総務部長から報告した。

・主な意見・質疑応答は以下のとおり。

## (1) 道民参加型組織について

(委員) 現状と進捗計画はどうなっているのか。

(事務局) 現時点で組織化には至っていない。今年度、ある程度、動くようにして、参加者から出てくる意見を尊重しながらの運営という形になるかと考えている。

(委員) 様々な人が館活動に関わると、ガバナンスが難しくなるので専門の職員が必要だと思うが、博物館には実施責任者(ボランティアコーディネーター)がいるのか。

(事務局) 企画グループが事務局となり、各研究グループと連携する形である。

(委員) ボランティアのマネジメントにはスタッフが必要。さらに、実施責任者、スタッフ、参加者でビジョンを共有しないと難しい。

## (2) 広報について

(委員) 学芸職員の個性が出るような広報のほか、来館者が北海道博物館の展示を見たことで得た成果や変化なども、「展示の成果の発信」となるのではないか。

## (3) 資料の収集・公開について

(委員) 新しく受け入れた資料の披露・公開はどのような形で計画・実施しているのか。

(事務局) 昨年度開催した「弥永コレクション」や、今年度開催予定の「りんご農家の道具」のような企画テーマ展などで、新着資料紹介ができるものについては実施している。

また、アイヌ民族文化研究センターでは、研究紀要で新着資料の紹介を制度化している。

(4) 研究成果の発信について

(委員) 研究紀要については、リポジトリ化しないのか。

(事務局) 研究紀要についてはPDFでの公開は実施している。レポジトリについては、予算も含めて実施については未定であるが、アイヌ文化については、アイヌ語アーカイブの整備にともない実施する予定なので、博物館全体として一体化して実施したいと考えている。

(5) アイヌ文化紹介小冊子『ポン カンピソシ』について

(委員) アイヌ民族文化財団(旧アイヌ文化振興・研究推進機構)が発行している『アイヌ生活文化再現マニュアル』とのすみわけはどう考えているのか。国や道のすみわけ及び協力関係という観点からうかがいたい。

(事務局) 当館のアイヌ文化紹介小冊子は、学校教育での利用を目的として、アイヌ文化についての基本的な事項を、学術的な知見に則って紹介している。一方、アイヌ民族文化財団の『マニュアル』は個別的、かつ具体的なハウツーなので、需要としては重ならないものと認識している。

(6) 資料数について

(委員) 今年度の資料収集の判断数値目標を300件としているが、昆虫などの採集資料であれば、300件はすぐに到達できる目標ではないか。

(事務局) 資料の点数と件数の数え方の違いである。

(2) 報告事項2 百年記念施設の継承と活用について

・資料3に基づき、百年記念施設の継承と活用に関する、これまでの経緯、今年度の取り組み等について、環境生活部文化局文化振興課・佐藤主幹から報告した。

・主な意見・質問は以下のとおり。

(1) これまでの総括について

(委員) 百年記念施設の「再生」と言っているが、「100年」から「150年」までを、どのように総括しているのか、を示してほしい。そうでなければ、「再生」や「次」をどのように考えるのかを提示することができないのではないか。

(委員) 記念塔を造るときに出た様々な意見は、どのように総括されているのか。そのような根本的な話をしなければ、個別の施設をどうするかという話にはならないのではないか。

(委員) これまでの経緯など、どうしてそのようなことになったのか、しっかりと掘り起こしたうえで、それらの歴史を踏まえてもらいたい。

(2) 協議会での議論について

(委員) 道庁として、「考え方」をまとめるところまで進め、またいろいろな意見を聞いて、そのうえで協議会で「専門的な意見を」と言われても、反映されるかが不明であり、当惑している。どこまで、何を発言すれば良いのか。

(3) 「再生」「活発化」に向けた提案

(委員) 長期的な「再生」ではなく、当面の間の「活発化」であれば、来客増加が大切だと考える。たとえば、百年記念塔の下に「道の駅」を設置し、博物館や開拓の村への人の流れを作るなど、考えてはどうか。

(委員) これまでは、開拓のシンボルが旧「開拓記念館」や「開拓の村」のある、この野幌の公園だった。50年後には、野幌森林公園内の森林がもっと成長して、とてつもない原生林があるのが野幌森林公園ということになるので、自然と環境と人との共生を象徴する記念塔のように別のシンボルとして考えるべきではないか。

(4) 歴史観の総括について

(委員) 開拓記念館から北海道博物館と名称が変わったことで、歴史観も変わった。同様に、百年記念施設についても名称も含めての議論も大切だと考える。

(委員) 北海道の歴史観、自然観は本州のものとは違うはずだが、現在は先住民族の存在が希薄すぎる。明治以降の開拓においても、アイヌ民族の働きが過小評価されている。今後の歴史の見方が重要になるが、この50年の総括とは、この次の「200年」に向けての総括ではないか。博物館にしても百年記念施設にしても、北海道は100年後、200年後の姿をどのように築いていくかを考えて議論すべきである。

(委員) 「開拓の村」の名称についても、将来的には、総括的に歴史を踏まえたいうで考えたほうがよいのではないか。

(3) 今後のスケジュールについて

・資料4に基づいて、平成30年度の協議会スケジュールについて事務局から説明した。